

島津義久と京都

— 薩摩の麓の新しいストーリーを求めて —

河原 洋子¹

¹第一工業大学 教授 (〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

E-mail : y-kawahara@daiichi-koudai.ac.jp

Yoshihisa Shimazu and his Kyoto

—Toward making new story of samurai towns called Fumoto in Satsuma —

Yoko Kawahara¹

¹ Professor, Daiichi Institute of Technology

(1-10-2 Kokubuchuo, Kirishima, Kagoshima, 899-4395, Japan)

Abstract: Yoshihisa Shimazu; the one of famous generals in the last 16th century in south Kyusyu; constructed Kokubu town in about his 70 years old. He had constantly lived in Kyoto for twelve years from about his 55 years old. And he was well known as person who had deep knowledge of culture. The author suggests that Yoshihisa's experience in Kyoto was reflected on his town construction and the environment of Kokubu. Therefore this paper chronologically describes Yoshihisa's cultural topics in Kyoto which were thought to be concerned with town and architecture. In addition, there were more than 100 samurai towns called Fumoto including Kokubu in Satsuma han, and Yoshihisa must be influential to other towns. This paper also intends to find an idea to connect each Fumoto to the whole by Yoshihisa and his Kyoto.

Key words: Kyoto, Yoshihisa Shimazu, Culture, Kokubu, Fumoto

1. はじめに

霧島市国分中央の辺りは島津家 16 代当主・島津義久（1533～1611 年）が晩年につくった城下町であった。義久は慶長 9 年に現在の隼人町住吉の富隈城から国分へ移り、慶長 16 年までの 70 歳代を過ごした。義久の屋形は現在の国分小学校の敷地にあり、そこが終の住まいになった。そして、義久がつくった国分のまちは、薩摩藩に 100 か所以上点在した麓と呼ばれた武家集住地として存続した。

しかし、現在は国分においても義久や麓のことはよく知られておらず、歴史的な景観等の保全・活用も十分ではない。義久についての研究は戦国武将としての政治に関することが中心であろうが、新しいストーリーが求められる。

義久は和歌や能を好み、特に公家の近衛家とは親しい間柄を築いた。義久の文化的な側面に着目すると、天正 15 年豊臣秀吉に降伏した 50 歳代中頃から断続的に滞在した京都の重要性が浮かび上がる。

国分と京都のまちの共通点は、現在まで残る格子状の道筋、北を玄武とする四神相応の地形が挙げられる。また、筆者は前号で、義久の屋形（現国分小学校）の南の道は、義久が国分のまちを計画する基軸になったことを述べた¹。

本稿では、義久が京都に滞在した時期のことが記された史料を用いて、文化や場所に関する内容を確認し、義久の京都の体験を明らかにする。そこから義久がつくった国分のまちと京都の関係性を考察することで、国分麓に新しいストーリーを見出したい。

また、一部の麓の跡は重要伝統的建造物群保存地区や日本遺産に認定されているが、全体としての麓をもっと活かしてゆきたいところである。薩摩藩の礎を築いたと言われる義久が残した「城はいらぬ者也」²の文言は、薩摩藩の城づくりに影響を与えたと言われる。城の在り方は都市づくりに影響する。本研究では、義久と京都に着目することで、麓をつなぐストーリーを見出すことも念頭に置いている。

分析には、主に『鹿児島県史料 旧記雑録後編』（以下「旧記雑録後編」という）の二および三を用いた³。これらの史料の出典を示す時は、書名と通し番号を適宜記す。

晩年の義久がつくった国分のまちと京都のつながりについて直接的な史料を示すことは難しい。ただ、自らが住むことになる新しいまちを義久が構想する際に、京都での体験が影響したと考えた理由の一つは、慶長7年正月、義久が国分に移る3年ほど前に詠んだ「伊呂波歌」

（旧記雑録三、1601）と題する一連の和歌（以下「義久のいろは歌」という）で、以下の一首に着目したことがある。

「みる事も又きくことも耳と目に とまらぬ人やたハけなるらむ」

この歌から読み取ることのできる義久は、在京においても京都のまちを積極的に見聞きし、国分の都市建設に活かしたと推測される。

2. 義久の在京時期

義久が上洛や帰国した日付を旧記雑録後編で確認し、主な在京期間をまとめたものが表1である。約12年の間に4度あった。当時は鹿児島を出てから大坂・京都まで一ヶ月ほど要していたため、複数の史料を照らして、「上洛」は京都に入った月、「帰国」は当時の居城など国元に着いた月とした。特定できなかった場合は適宜記した。

義久が在京した時期は、秀吉の晩年の事業が京都でも繰り広げられていた。表の右欄には一般的に知られている秀吉による建設を伴う事業を抜粋し記した⁴。義久はこれらの建設事業について実際を見聞きしたであろう。括弧内は義久が命じた島津氏としての参戦である。

表1 義久の在京期間

年号	義久の移動	京都での秀吉による建設を伴う事業等
天正 15	1)上洛 6月	聚楽第完成、北野大茶会
天正 16	帰国 10月	後陽成天皇行幸、大仏殿居礎の儀
天正 17	2)上洛 9月	
天正 18		(小田原の陣)
天正 19	帰国 1月	御土居建設、天正地割
天正 20		(文禄の役、文禄2年まで)
文禄 2		大仏殿上棟
文禄 3	3)上洛 5月か	指月伏見城に秀吉入城
文禄 4	帰国 9月か	聚楽第破却
文禄 5		伏見地震
慶長 2	4)3月には在京	(慶長の役、慶長3年まで)
慶長 3		木幡山伏見城で秀吉没す
慶長 4	帰国 3月	(庄内の乱)

3. 義久の京都の体験について

義久の文化や場所に関する京都の体験を取り上げ、先に述べた各在京期間において特徴的なことをを中心に考察を交えまとめた。ここでは、最初の期間から順に見てゆく。

1) 義久の最初の在京：秀吉の茶の湯など

剃髪して龍伯と号した義久は、天正15年5

月 8 日、大平寺（現薩摩川内市）で秀吉に降伏した後、末娘の亀寿を人質に置いて鹿児島に戻ったのであるが、鹿児島にやって来た木食興山上人に誘われ、大平寺を去った秀吉を追うように鹿児島を発った。木食興山上人とは、義久が秀吉に降伏するまでを中心に仲介した人物の一人で、義久の上洛にも同行した。秀吉は数年前から義久との交渉に、他にも文化人として高名な千利休や細川幽斎を用いていた。

最初に上洛した頃の京都では聚楽第が完成し、その年の 10 月には北野大茶会、翌年には秀吉が聚楽第に後陽成天皇を迎えるなど、文化的な素養を必要とする行事・事業が行われた。義久も在京中に数多くの茶や歌の会等に参加することになる。

義久の最初の上洛のスケジュールは、旧雑後編二に複数記されている。それらによると、義久一行は、天正 15 年 6 月 16 日に帖佐を出て、陸路と海路で、栗野、八代、博多、厳島、鞆津等を経由し、7 月 10 日酉の刻に堺に到着した。旅の途中では、義久は木食興山上人と一緒に歌を詠み、秀吉による茶の湯に招かれた。

ではまず、この茶の湯の様子が詳しく書かれた部分を以下に引用し、義久の体験を明らかにする。茶の湯は茶室において行われる飲食を伴う総合芸術とも言われ、茶への関心や経験は建築や都市につながる。

「廿六日、未明 関白様へ御茶湯、御座ハ三帖敷、とこ有、其内二朝山之御繪被卦（ママ）、とこの最中二初花のかたつきはうほんにすへ被置、御飯過御茶之時、かたつき水さしの前二被直、關白様御手前也、御茶こくむ也、義久ハ御ふかなひにて候すると被仰候て、三すくひ也、御茶壇ハ高らい茶壇いとなり、いとのはしまり、此茶壇と聞得候、御釜ハせめつほ也、忠棟江ハ五すくひ、天王寺屋宗及くくり迄罷出、御案内者被申、御茶過御帰之時も、くくりの外迄宗及をくり被申、朝山の繪ハ御座過迄懸られ候、關白様御手前の時御安座にてハなく候、おりひさ

にて被遊候也」（旧雑後編二、410、下線は筆者）

以下、この部分を、会の進行に合わせ、考察を交えて解説する。

6 月 26 日、秀吉による茶の湯が行われた場所は博多であった。まだ夜が明けないころに始まり、義久と義久の重臣である忠棟（伊集院忠棟、幸侃）が同席した。

茶室は畳 3 枚が敷かれた広さであった。部屋には床があり、そこには絵（軸）が掛けられ、盆の上に茶入が置かれていた。食事を終え、茶の段階になると、床の茶入は水差しの前に移され、秀吉はその茶入を使って手前した。

この記録には、絵、茶入、茶碗、釜の銘等が記されている。秀吉、又はその日秀吉を手伝っていた堺の豪商で茶人である宗及（津田宗及）がこれらの道具の説明をしたであろう。特に、この記録によって、現存する重要文化財である「初花」と銘が付けられた肩衝茶入⁵を義久が見たことが分かる。茶碗は高麗（朝鮮）で作られた井戸茶碗であろう。

秀吉は茶入から茶をすくうときに、「義久ハ御ふかなひにて候する」と言い、義久には 3 枠、忠棟には 5 枠取り出した。義久への茶の量が忠棟より少なかった理由は、義久の体調が悪かったことを秀吉が気遣ったためと思われる。

茶席への案内や帰るときも、くぐり戸の外まで宗及が送り迎えをした。秀吉は正座して茶を点てた。彼らの行為は茶の湯の手順であつただろうが、秀吉が義久を丁重に扱ったしとして、この記録の書き手に受け止められている。

では、この記録は誰が書いたのだろうか。記録の冒頭には「天正十五年自六月十五日 至七月十日 日々記 但貫明公御上京御日記なり」とあるが、上記の引用箇所の他は、義久のことを上様や太守様と呼び、島津一族にも敬称・敬語等が使われており、義久による記録ではないと考えられる。同席していた忠棟とするのが妥当であり、忠棟は茶の造詣が深いことでも知られる。ただし、忠棟にも敬語が使われているな

ど、辻棲が合わない点もある。

一方、上記の引用箇所と類似する内容が漢文体で記された「義久公御譜中」と題する記録があり（旧雑後編二、354）、重要なところのみ龍伯の名が書かれている。「茶亭」「茶室」という語は書かれているが、「茶湯」はない。室内や道具の描写も類似しているが、茶入れは「小壺」と書かれている。秀吉がすぐった茶の量は書かれていませんが、茶の湯の流れや茶の味が詳しく記されている。また、秀吉を殿下と呼び、島津一族に敬称はつけられていない。そして義久が体調を崩したところ、秀吉が医師を来させ、薬を薦められ回復したことが書かれている。体調は、些細なことかもしれないが、当人にとって重要である。こちらの記録は義久自身により記されたものであろう。

これ以前に、織田信長の依頼を受けて近衛前久が下向し、鹿児島にも滞在した。当時、前久は都の茶を義久に披露したであろう。しかし、そのころはまだ4畳半より狭い茶室は用いられなかった。秀吉の茶の湯が行われた草庵の茶室は、義久が最初に上洛した数年前から利休により始められたとされる新しい形式であった。どちらの記録にも茶室のつくりが書かれていたのは、書き手にとって斬新だったためと推測される。

また在京中には、義久は連歌の宗匠であった里村紹巴に頼んで連歌の会を開催し、「賦何船連歌」として義久・忠棟など12名により百句が詠まれた⁶。旧雑後編には、前久邸や高野山詣で等で義久が詠んだ歌の記録もある⁷。

義久の帰国の一頃にも茶の湯があった。天正16年9月8日大坂の宿で行われたときの顔ぶれは、幽斎、石田三成、点前をしたのはその年の夏に上洛した義久の弟・義弘であった⁸。

この帰国については、最初は義久一人が許されたが、亀寿との別れの哀しさを詠んだ義久の歌と幽斎の返歌を秀吉が見て、亀寿の帰国も許された⁹。親子そろって鹿児島に戻ると、喜び

を伝えようとする人々が市を成すように門前に集まつた¹⁰。

2) 義久の二度目の在京: 社寺詣でなど

天正17年8月24日に義久は再び京都へ向けて鹿児島を発つた。一か月ほどかけて大坂に着き、程なくして聚楽第に上がつた。在京は久しぶりであり、土木工事は漸く終わっていた¹¹。

旧雑後編二、天正18年の「義久公御譜中」と題する記録の中に、義久自身が訪れた場所を記したと考えられるものが分散している。それらを中心に、二度目の在京期間における義久の所在を確認すると、京都を離れた期間が度々あつた。天正18年1月、4月初め、6月末には、京都を発ち大坂に一か月ほど滞在した。3月は伊勢参宮のために二週間ほど出かけた。比較的短い不在は、秀吉の東国からの帰洛を迎えるために8月終わりから大津、及び9月末から大坂に出向いたときの一週間ほどであった。11月に大和に行つたが、二日間と短かった。

天正18年は、義久は特に多くの社寺を参詣していた。上記史料から義久が参詣した社寺を拾い出したものが表2である。少なくとも京都11か所、大坂3か所の社寺に行っている。

聚楽第は現在の二条城の北にあり、聚楽第と現在の京都御苑に挟まれた範囲に武家屋敷が集められた。おそらく義久の屋敷もそこにあった。元旦には屋敷から2キロほど西の北野天満宮を詣で¹²、秀吉の華やかすぎる行列を見た¹³。

この在京の帰國が決まった直後の12月初めにも義久は北野天満宮を詣でた。翌日には天満宮に程近い平野神社も詣でている。年末年始共に参詣したのは、他には大坂の住吉大社があり、祭神は海上の守護神で、和歌の神でもある。

金閣寺と大徳寺にも行った。記録では、この2か所については「詣（詣でる）」ではなく、「入（入る）」という語を用いて記されている。金閣寺へは、別の花見の後で前久に従つて入ると、食事や酒を勧められ、芸者を呼んだ能があり、帰宅が遅くなつた。大徳寺では珍しい服装

の朝鮮国使節を見た¹⁴。

他には、東山青蓮院を詣で、尊円親王¹⁵の真筆を拝見した。西芳寺を見に行き、夢窓国師の庭を見て歌を詠んだ。少し遠出して、鞍馬山の中腹にある鞍馬寺を詣でるなどした。

また、社寺の参詣以外にも賀茂川流域や祇園、東山へは興行見物や酒宴等でたびたび訪れた。前久の居場所のことは、記録には「東山 前久公」や「近衛殿」と書かれ、義久は頻繁に訪問し、歌の会や僧侶の講話等に同席した。紹巴との親しい間柄も続いた。大坂に滞在した時も名所に出かけており、4月のときは終日勧進能を見物し、目と耳の慰めになった¹⁶。

最も数多く訪れた社寺の一つが清水寺であった。清水観音を詣で、その帰りには知人宅や宿坊に寄った。また、義久は11月晦日に三成を茶室に招き、その晩に帰国の暇が与えられた。その日から最初に詣でた寺は清水寺であった。

そして、前久に帰国の挨拶をした翌日 12月6日に京都を発ち、大阪で住吉大社に詣でるなどしてから出船し、天正19年正月14日に鹿児島に着いた。この旅で義久は「海上寒風無為方故候哉、従中途虫氣出合」（旧雜後編二、728）と体調を崩した。

その年の10月、義久は出兵の拠点となる名護屋（現佐賀県）へ向かい鹿児島を出て富隈を過ぎた時に「採薪之憂、而不得回頭」（旧雜後編二、778）ということになり、代わって義弘が赴いた。

2度目の在京期間は、秀吉による東山の大仏殿（方広寺）や大仏の造営が本格化し、義久も材木の調達を依頼された。また、義久の後継者として家督を継ぐことになっていた義弘の次男・久保が上洛し、秀吉の小田原攻めに出陣した。常に増して神仏に対する関心が高まった社会の中で、久保のこともあるであろう、義久はたびたび京都を留守にした多忙さを縫うように多くの社寺を詣でた。同時に茶や歌の会にも数多く参加し、芸能や酒宴も楽しんだ。京都の

土地勘を得て、地元の人々にも馴染み、多くを見聞したのである。

表2 天正18年に義久が訪れた主な京都・大坂の社寺

No.	社寺名	参詣月日（天正18年）
1	北野天神	1. 1, 12. 3
2	金閣寺	3. 27
3	青蓮院	3. 29
4	祇園神社（八坂神社）	6. 7
5	西芳寺	6. 12
6	清水寺	6. 18, 9. 25, 10. 24, 12. 2
7	多々須宮（下賀茂神社か）	6. 20
8	大徳寺	7. 28
9	聖護院	10. 29
10	鞍馬寺	11. 4
11	平野（平野神社）	12. 4
12	住吉（住吉大社）	2月吉日, 4. 20, 12. 8
13	天王寺（四天王寺）	7. 13
14	天満（大阪天満宮）	7. 14

3)文禄期の義久の上洛と近衛信輔の薩摩下向

文禄3年4月14日、前久の子・信輔（信尹）が秀吉の命令で薩摩へ配流となり京都を出た。義弘の三男・忠恒（家久）が東寺まで信輔を見送った。そのころ義久は上洛の途中で、保戸（現大分県）では、信輔からの使者が送られ、義久も使者を返した。そして義久は京都へ、信輔は坊津へと向かった。9月8日久保が朝鮮で没し、忠恒が家督を継いだ。

義久は居城を鹿児島から大口へ移すよう秀吉から命じられたが、「富隈」で宅地を占い、そこへの転居を希望した。文禄4年、義久は帰国して浜之市に移った。富隈城が建つところの地名が住吉、近くの港のある辺り一帯が浜之市（浜市、濱市）である。

富隈城からは、それまで居城としていた内城と同様に、鹿児島湾の向こうの桜島がよく見える。桜島を詠んだ10月9日の日付の短冊（旧雜後編二、1615）には義久や家臣8名の歌

がある。その中から義久と忠棟の二首を挙げる。

「春にこそさくら嶋ともいひつらめ しくるるけふハ紅葉ならまし 龍伯」

「冬さへも咲ちるなみの花よりや さくら嶋とは名つけそめけん 幸侃」

その後、信輔は帰洛することとなり、文禄5年7月、鹿児島を出船した。義久は富隈城で歌の会等を設けるなどして信輔を送別した。

信輔の帰洛については複数の記録が残されており¹⁷、送別の会についての記述も各々で若干異なる。ここでは、信輔の日記である『三藐院記』¹⁸により確認する。移動や催しなど信輔の主なスケジュールと、その日の義久のことが分かる部分を書き出したものが表3である。

信輔は浜之市で4泊5日を過ごし、義久の家臣等が集まり歌や能の会が開かれた。その後は志布志へ向かう途中で、忠棟が住む庄内（現宮崎県）に寄ることになり、庄内でも送別の会が続けられた。義久も後から庄内に行き参加した。

島津氏側の人々にとっては、本場の芸能に地元で接するまたとない機会になったようで、信輔は和歌、能、乱舞、茶、小唄に駆り出されている。催しの構成はおおよそ決まっており、歌と能は主に日中から行われ、夜は乱舞になる。これらの会は、義久が京都で参加したものに倣って準備されたのだろう。

歌の題は「松蔭新涼」で、富隈城で詠まれた連歌の中に「すまい」という語が使われた以下の義久の句がある（旧雑後編三、82）。

「松かけのすまい涼しき岩井かな 龍伯」

能は座敷で行われ、会の参加者による合計20演目以上が披露された。義久は主役の相手をするワキの僧侶が御箱であった。義久は坊主頭を余興に活かしており、形式的な隠居であったことが窺われる。

最終日は夜や明け方まで酒宴が続いた。老いも若いも次々に舞い、無礼講であったようである。信輔は「大飲」「乱酒」と記している。義久のいろは歌には、島津氏の酒宴の様子を想像

させる以下の二首がある。

「のむ酒の正躰なきもせうし哉 あまりのまぬも人のかけみち」

「君をしもかるしめてさへ科なきハ 月花雪のたハふれのとき」

これらの歌に詠まれた光景が、まさに信輔の目前で起こったであろう。信輔の日記と重ねれば、当時の座敷の使われ方も想像できる。

表3 信輔の帰国と義久のこと（文禄5年7月）

日	信輔のスケジュール	義久（龍伯）のこと
10	鹿児島出船、濱市に着	晩龍伯来入
11	龍伯にて和歌会、晚乱舞	
12	於座敷能	三輪・夕顔龍伯ワキ
13	（能）、夜乱舞、大飲	帰宿、龍伯入来
14	出船、めくりに着	
15	逗留	
16	光神山、庄内に着	
17	朝すき、幸侃屋敷をも一覧	
18		龍伯被着
20	座敷能	龍伯来入、夕顔龍伯ワキ
21	能以後酌取出及暁天、大酒也、老若不残順舞	舞台にて龍伯も定家のワキ、乱酒之中宗吟とせらる
22	花火、茶、小唄	龍伯帰城
23	依雨滞留	
24	志布志へ越、雨中途より降、志布志に着	

4) 義久の最後の在京とその後

義久の最後の上洛は慶長2年春、義弘や忠恒は慶長の役に出陣していた。

秀吉が伏見城に移ってからは、多くの武将が城の周囲に居を構えた。「伏見桃山御殿御城之画図」（明治14年出版）¹⁹で島津の名を探すと、城の近くの区画には「嶋津大隅守」「嶋津左馬頭²⁰」（現桃山町島津の辺り）、そこから2キロほど西の川（現東高瀬川）の向うには「島津兵庫頭」（現島津町の辺り）がある。『島津氏正統系図』²¹によると、大隅守は忠恒のこと

であるが、城に最も近い「嶋津大隅守」の区画が義久の屋敷であろう。これらで形成された範囲が島津一族や家臣にとって日常的に往来する生活圏であり、義久等は、自らが行った都市建設においても、まちの規模を計画する基準にしたと考えられる。

また、現在の今熊野観音寺には、義久が亀寿を案じて建立したと考えられる五輪塔がある。写真1²²の中央にある大型のもので、西を向いて建つ。黄みの石には、梵字の他に、地輪の正面に「慶長三年」及び側面に「藤原氏島津義久」の文字が刻まれているのがよく分かる²³。

この寺は京都と伏見の屋敷を結ぶ道の途中にあり（図1）²⁴、秀吉の大仏殿や東山にも近く、義久がよく知る場所と言える。義久は自身の跡と心を京都に残した。建立されたのは慶長の役という異国の話に都が湧いていた頃かもしれない。

しかし、慶長3年11月中頃の撤退に伴い、島津氏も相当な損失を出した。12月10日、三成が秀吉の遺言を告げ、慶長の役は終わった。そして義久であろうか、託宣を受け、12月13日から15日の三日間に、第一「御託宣連歌」から始まり第十「賦何木連歌」で終わる合計千句、及び追加「賦何船連歌」8句から成る一連の賦物の連歌が詠まれた²⁵。合計20名によるもので、義久、義弘、忠恒の発句が一つずつある。この歌会は、役に対する句切りの意味とも鎮魂の儀式とも思われる。

そして義久は、慶長4年2月末に大坂を出て、3月中頃に「富隈私宅」（富隈城）に戻った。帰路の途中の3月9日に伏見の茶室で忠恒が忠棟を手打ちにし、6月頃から庄内の乱が起こり義久は対応に追われた。

その後は、敗者側についた関ヶ原の戦いで徳川家康からの上洛の求めに病気を理由に応じないまま慶長7年に島津氏は所領安堵された。そして慶長9年に義久は家臣を京都に派遣して国分を占わせ、富隈城から国分に移ったとされる。

では、義久にとって茶や歌は何であったのか。義久のいろは歌から以下の二首を挙げる。種々の芸能に対する義久の向き合い方が述べられている。

「連歌をはしハしか隙も忘るなよ こと葉づきもこの道にあり」

「歌のみち亂舞茶の湯もたゆむなよ かたらふ人のあいさつのため」

義久は芸能など文化的なことへの関心から見識を高め、交友関係を広げたことによって、国と自らの立場を守ったことを自覚していた。



写真1 義久建立の五輪塔

図1 今熊野観音寺の位置

4. 義久の体験が麓に表れたこと

以上、義久が京都で体験した文化的な事柄を取り上げ、時間の経過に沿って述べた。すると、義久は国分のまちづくりにおいても京都を身近に感じられる環境をつくったと考えられ、それは麓の新しいストーリーを生む。最後に、その手掛かりについて考察する。

義久は通算して7年近い在京で、本場の茶、歌、能等に接し腕を上げたであろう。そうであれば、帰国後もそれらを継続できる環境として、国分にも義久が茶や能をする場所があり、歌心を誘われる景色や空間があった。

また、国分のまちの周辺には正八幡宮や台明寺など古代の社寺が立地し、義久は屋形の東西に金剛寺と龍昌寺を建立した。それらの間には義久により移転されたと伝わる若宮神社があり、玉依姫命を祭る。義久は様々な社寺に囲まれて生活できる、京都に近い環境をつくった。

国分に京都を見出すためには、他には名称が

手掛かりになる。富隈城は港に近く、地名の住吉からも大坂を連想させる。すると、そこから上流にある国分が京都であろう。義久が居住していた慶長の頃に屋形の近くにあった観音寺（大隅国分寺跡）²⁶は、義久建立の五輪塔（逆修墓）がある今熊野観音寺を思わせる。また、屋形の北手には中世山城の清水城があり、今も残る清水（きよみず）という地名からは、義久がたびたび訪れた清水寺が浮かぶ。歌を修練し続けた義久は、言葉で都を想起したとも考えられる。

京都の影響とは、上記のような京都を取り入れようすることと、地元の固有さに気付くことがある。後者としては、義久は長い間内城で暮らし、生涯桜島が見える住まいにこだわったと思われる。国分の屋形からの桜島の眺望は、更に富隈城より内城に近い。

また、17世紀初め頃、全国的に大型の城郭が建設された中で薩摩藩は追随しなかった。このことは、秀吉が進めた華美で大規模な形を受け入れない義久の価値観を表すようにも思われる。現在麓の跡に見られる全体的な統一感は、どちらかというと簡素さにある。

現在の国分に義久が暮らした頃を見出すことは難しいが、まちの周囲の山々や水路など水の流れに見ることができる。桜島の眺めも重要である。文化を重視する義久の考え方は後の世代にも引き継がれ、形あるものとして現在でも見ることができるだろう。義久と京都などストーリーを意識してまちを見て、発見し、ふさわしいものに整える積み重ねにより、歴史を活用した魅力的な環境をつくり上げることができる。

本稿は義久に絞って述べたが、同時代に在京した島津一族や家臣は多数いた。麓であった多くの地域には郷土の先人が都へ上った史料があり、彼らの視線が注がれたところを明らかにできる。京都をキーワードにして個々の麓の歴史や景観等を見直すことにより、麓を全体的につなぐ新しいストーリーが織り出されると考える。

注

¹ 河原洋子：島津義久による国分の都市建設－ライフステージと信仰に着目した考察－、第一工業大学研究報告、第31号、pp. 33-41、2019

² 「城はいらぬ者也、尤堀堀等は無之候とも事かぬ也、士程よき堀は無之候」（薩藩旧伝集）

³ 『旧記雑録』は伊地知季安・季通が島津氏に関する古文書・古記録を採集・編集したもの。翻刻は以下。鹿児島県維新史料編さん所：鹿児島県史料 旧記雑録後編二、鹿児島県、1982／旧記雑録後編三、1983

⁴ 秀吉の建設事業については以下を参考にした。
京都市埋蔵文化財研究所監修：京都秀吉の時代～つちの中から～、ユニプラン、2010

⁵ 初花肩衝茶入の伝来：鳥居引拙一大文字屋疋田宗觀－織田信長－松平忠誓－徳川家康－豊臣秀吉－宇喜多秀家－徳川家康－松平忠直－（松平備前守）－徳川将軍家（徳川美術館・根津美術館編：名物茶器－玩貨名物記と柳営御物－、徳川美術館・根津美術館、1988）
国指定文化財等の情報は文化庁国指定文化財等データベース（<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>）

⁶ 旧雑後編二、388

⁷ 旧雑後編二、384・385

⁸ 旧雑後編二、510・515

⁹ 旧雑後編二、454・540

¹⁰ 旧雑後編二、540

¹¹ 「而在洛者既以久矣、此間營屋形於聚樂、漸終土木之功、則美麗甲于諸侯也」（旧雑後編二、610）

¹² 「以在京師之故詣北野天満」（旧雑後編二、627）

¹³ 「殿下參 内行列華美、非所言語之可述」（旧雑後編二、627）

¹⁴ 「異形異服異様也」（旧雑後編二、677）

¹⁵ 尊円親王は伏見天皇の皇子、青蓮院門跡、天台座主。和書書道の青蓮院流を開いた。

¹⁶ 「慰耳目也」（旧雑後編二、656）

¹⁷ 信輔に随行して上京し、慶長2年3月初めまで京都や伏見に滞在した島津氏の家臣である阿蘇黒斎玄与が記した日記等がある。

¹⁸ 『史料纂集 三藐院記』続群書類從完成会、1975

¹⁹ 「伏見桃山御殿御城之画図」はウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」で公開されている。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542510>

²⁰ 「右馬頭」とする資料もある。

²¹ 尚古集成館編：島津家資料 島津氏正統系図（全）、島津家資料刊行会、1985

²² 写真1は筆者撮影（2019年3月）

²³ 本五輪塔に関する近年の調査研究は以下がある。松田朝由：京都府今熊野観音寺に所在する山川石製石造物群について、鹿児島考古、第44号、pp. 85-96、2014

²⁴ 図1に用いた地図は以下。京都市都市計画課：近畿圏整備区域図 1:50000、2016

²⁵ 旧雑後編三、627-636

²⁶ 観音寺については注1を参照されたい。